

JAIR Newsletter

日本国際政治学会ニューズレター

No. 91 October 2000

IR 理論と日ロ関係

木村 汎 (国際日本文化研究センター教授)

「理論」を勉強する者は一流、「地域研究」のみに従事する者は二流の研究者——これが、極言すれば、今日の米国の国際関係学界に支配的な風潮だという。

これは、地域研究に携わっている者に酷な評価である。地域研究者は、対象国の言語の習得に時間とエネルギーを費やす。対象地域の特殊な「文化」にも通曉せねばならない。これらの作業遂行のために、頻繁に対象国に旅行し、居住し、知己をつくり、コミュニケーションを維持する必要がある。

他方、専攻分野（ディシプリン）の「理論」のみの検討に従事する者は、冷戦が終焉し米ソ二大核大国間の対立が解消したにもかかわらずほとんど英文からなる刊行物に目を通しておればよい。米国で驚くほど若くして有名となったり、次から次へと話題作を世に問い続ける国際政治学者のなかには、そのような人々が多い。

このように地域研究者にとりアンフェアな評価傾向とはいえ、地域研究者の側にも反省すべき点がない訳ではない。それは、右のような諸困難にかまけて、政治学、経済学、社会学など各ディシプリンにたいする貢献に、これまでさほど意を用いてこなかった点である。例えば、自己の対象地域が果して他の諸地域と比べて一体どのような類似性や相違性をもつのか。その答えいかんによっては、どのような仮説の設定が可能か（または可能でない）のか。一進んでこのような問を検討することを怠りがちだった。要するに、個別地域の研究に埋没して、一般理論化の作業を軽視しがちだった。

私もソ連/ロシア地域研究者の一人として、地域研究者がややもすると陥りがちな右のような欠陥に陥っていた。一昨年八月から昨年五月にかけて、コロンビア大学へ留学したさい、米国の国際政治学者たちは、直接批判するとしなやかにかかわらず、私をそのような地域研究者として眺めているようだった。そこで、私は遅まきながら、ソ連/ロシアの外交政策決定の研究をはじめた。そして、その理論がソ連/ロシアの対日政策決定に当てはまるかを検討してみた。

無数にのぼるロシア対外政策の規定要因は、米国主導

で進められてきた IR（国際関係）理論によると、次の三種類に大別できる。国際環境要因。国内環境要因。リーダーシップ。私は、少なくともゴルバチョフ～エリツィン期の対日政策を具体的ケースにとるかぎりにおいて、右の三つのうちどれが最重要要因であるとは断定しえない、と考えた。

まず、必ずしも日ロ関係は改善されたとは言えない。それ故、なによりも東西両陣営の対立構造を重視する「ネオ・リアリスト学派」の見解に、私は賛同しえなかった。

次に、ソ連解体後のロシアの解体やナショナリズムの跳梁などロシアの国内状況は、たしかにゴルバチョフやエリツィンの対日政策に大きな影響をあたえた。しかし、そのような国内諸条件を抱えながらも、両政権は、中ロ国境画定協定を締結し、中国に数多くの島嶼を割譲した。また、ウクライナにクリミア半島を正式割譲した。これらの決定が主として対内的要因に促進されて決定されたとは、想像しにくい。

ロシアの政治風土において指導者が果す役割の大きさについては、改めて説くまでもない。しかし、ロシアの最高政治指導者といえども、完全なフリーハンドをもっている訳ではない。とりわけ相手側のある外交の領域において、自己の意志を貫徹しうる筈がない。

ロシアの対日政策形成は、三大規定要因のどれか一つだけをもって充分説明できるものではない。三要因のすべて、いな第四、第五ファクター（例えば、イシュー問題の緊急性や優先度、決定のタイミングなど）も考慮にいれて、ケース・バイ・ケースで総合的に判断せねばならぬ。これが、私が米国留学中に到達した結論だった（拙著 *Distant Neighbors* 参照）。

今年八月初めアレックス・ブラウダ（オックスフォード大）と昼食した折、この結論を話したら、同教授は、「どうして今さらそのように当たり前のことを述べるのか」と怪訝な顔をした後、付加した。「米国では、他から自分を際立たせるために、極端な立場をとりがちなんだよ。現実には理論によって割り切れない複雑なものなのに。」

木戸翁先生のご逝去を悼む

日本国際政治学会理事長 山本吉宣

本学会名誉会員、元理事長、木戸翁先生は、長期病氣療養中のところ、本年6月10日にご逝去されました。享年69才。木戸先生は、1932年5月5日に名古屋市にて出生され、京都大学法学部を卒業の後、名古屋大学大学院法学研究科で学ばれました。その後、名古屋大学法学部助手、(財)日本国際問題研究所研究員(研究所創設時のメンバーという)を経て、68年、神戸大学法学部助教授、70年同教授に任ぜられました。88年から90年にかけて法学部長をつとめられ、96年定年退官されました(神戸大学名誉教授)。お亡くなりになるまで神戸学院大学教授として教鞭をとられました。本学会に関しては、57年会員になられ、72年から理事。82年から運営委員となり、学会の発展にご努力を傾けられました。副理事長を経て、92年—94年、理事長になられ、洩身の力をこめて学会の運営にあたられました。木戸先生の次の鴨理事長の時行われた幕張の国際会議も、木戸理事長がその道筋の多くを作ったといえます。理事長ご退任後も、引き続き理事、監事として、学会のために尽くしてこられました。

先生の学問領域は、周知のようにユーゴスラヴィアを中心とするバルカン現代史、社会主義研究でありました。木戸先生を東欧研究に導いたのは、1956年秋に発生したハンガリー動乱であったと言うことであります。「民衆を命を賭した暴動に駆り立てたスターリン時代の“社会主義”とはなにかという疑問は、スターリンによってブロックから追放され、それとはまったく異質のもう一つの“社会主義”を建設しつつあ

たユーゴスラヴィアに対する関心」(『バルカン現代史』(山川出版、1977年))にむかわしめたということでもあります。そして、この分野において、木戸先生は、最近著である『スラブの国際関係』(共著、弘文堂、1995年)をはじめ多くの業績を残されました。それらの業績において、歴史分析に根ざしつつ、社会主義、バルカン、ユーゴスラヴィアなどを見るときに、「断続と連続」、「分離と統合」、「愛着と不信」など、複眼的な視野をとることを尊重され、また説かれました。さらに、単に歴史だけではなく、東京大学出版会から、『講座 国際政治』の1巻として、『現代世界の分離と統合』(1989年)という理論色の濃い本も編纂されました。そして、事実上最後の論稿である、99年6月雑誌『世界』での対談「ユーゴ空爆は正しかったのか」において、木戸先生は、一方的な価値判断からの行動は、結局、紛争を泥沼化させると強く警告されたのであります。

私事にわたりますが、木戸先生には、70年代後半から、いろいろな面で大変お世話になりました。颯爽とした、はやくからロマンスグレーの風貌を持たれていた木戸先生には、まぶしいものがあり、また、その学問に対する真摯さには頭が下がるものがありました。住吉での告別式において、ご長男の啓一郎氏から、木戸先生がご家族をことのほか大切にされ、休みの日には、家族そろってお出かけになり、団樂を楽しまれたとお聞きしました。お人柄がしのばれ、深く心に刻まれたことであります。木戸先生、やすらかにお休み下さい。

《2000年度研究大会分科会報告》

C-1 アメリカ政治外交 II

本部会では桜田大造会員(関西学院大学)による「パワー・イメージ・アプローチによるカナダ外交政策の分析—トルドー=クラーク時代」の報告が行われ、討論者のコメントのあと質疑応答を行った。報告ではレジュメのほか周到なデータと参考資料が用意され、内容が理解し易いように配慮されていた。現在まで構築されてきたカナダ外交のパワー・イメージ、例えばスモール、ミドル、プリンシパル・パワーと国際関係論の一般理論、報告者はリアリスト(特にK.ウォルツ、J.カートン)のそれとを統合したパワー・イメージ・アプローチなるもので、トルドー=クラーク両政権期(16年間)の外交

政策を「政策・行動・結果」の三つの類型を照準に実証的に検証し、評価している。さらに、実証研究の部分は、J. ナイ、R. コヘインの先駆的なそれを継承しつつ、三番目の「結果」を加えて類型化することにより、トルドー時代の外交諸政策が事実、スモール、ミドルあるいはプリンシパルのパワー・イメージに該当するかという、評価の次元により具体性を持たせるといふ、意欲的な試みでもある。また、この三つのパワー・イメージを検証することは、戦後のカナダ外交を総決算することにも通じる(詳しくは、報告者の近刊の名著を参照)。

(司会・討論者：奥田和彦)

C-2 日本外交史

日本外交史では、井口治夫会員(同志社大学)の「鮎川

義介の戦後経済復興構想と日米関係」と吉川洋子会員(京都産業大学)の「日比通商航海条約交渉—アジア途上国との通商交渉」の二つの報告が行われた。井口報告は、国会図書館憲政資料室の鮎川義介文書を利用しつつ、米国資本を中心とする外資の直接・間接投資、直接金融による中小企業の育成を基軸とする鮎川の戦後日本の経済復興構想とこの実現に向けた米国との交渉過程を明らかにした。吉川報告は、外務省の戦後外交文書やフィリピン側の第一次史料を利用して、難航した日比通商交渉の過程を日本の対小国外交、外交スタイルの観点から報告した。別枝行夫、福永文夫会員などから、鮎川構想に対するGHQ専門家や大蔵省の反応などについて質問があり、また中島信吾会員から交渉における岸首相の関与やアメリカの影響などについて質問が出され、報告者から詳細な応答がなされた。さらに、吉川報告に関連して井口武夫会員から日比通商交渉当時の外務省内部では安保改訂に追われる雰囲気があったとの補足説明がなされた。従来の戦後外交史では軽視されてきた問題に新資料で光をあてる、充実した内容の研究会であった。

(司会：天川 晃)

分科会 C-8 東アジア国際政治史

今年度の東アジア国際政治史分科会は、戦間期の東アジアにおける国際関係をテーマとし、50名近い参加者を集めて盛況であった。小池聖一会員(広島大学)からは「ワシントン体制論」理解の変遷、また伊香俊哉会員(立教大学)からは「戦争違法化体制と日本の対中国政策」の題で報告が行われた。いずれも戦間期の国際政治を幅広く見通した上で、その時期に新しく作りあげられようとした東アジアの国際秩序の枠組みをどのように評価すべきかとの問題意識に立つものであり、レベルの高い報告であった。

小池報告は、歴史学のあり方をアプローチの中心として、「ワシントン体制」と呼ばれてきたものを様々な国際政治史研究者がどのようにみてきたかを分析した。そこではこの「体制」の多義性、すなわち、欧米各国、日本、中国にとっての意味合いの違いが指摘される。伊香報告は、国際法と外交史をつなぐ領域の研究である。「戦争違法化」をキーワードに、戦間期に築き上げられてきた国際秩序の枠組みに日本がどう対応し、そのなかで日中戦争をどのように正当化し、またしえなかったのかを論じた。同時に、その時期の国際秩序の問題点を数多く指摘している。フロアからも数々の質問が出されたが、すでに多大な研究成果が出されている戦間期の東アジア国際政治史についても、まだ多くの論点が残されていることを痛感した。

(司会：滝口太郎)

《第4回日独合同シンポジウムの概要》

去る9月19～20日、国際文化会館(東京都港区六本木)にて、第4回日独合同シンポジウムが開催された。今回は“Redefining Roles of Germany and Japan in International Relations”をテーマに、安全保障、通貨・貿易、ODA、地域統合、国連政策などイシュー・エリアごとに日本とドイツの対外政策を比較研究するセッションを2日間にわたって設け、日独両国の研究者が報告と討論を行った。ニューズレター90号でお伝えしたように、第2日目午後のセッション(国連政策)は一般公開され、ミレニアム・サミットを終えたばかりの国連への関心の高さを反映して、多数の聴衆を迎えて活発な討論がなされた。

2日間に開かれた各セッションのタイトルとパネリストは以下のとおり。シンポジウム全体のコーディネーターとして、日本側は太田宏対外交渉委員(青山学院大学)、ドイツ側はハンス・マウル教授(トリアー大学)が尽力した。

9月19日

Session 1: Foreign Policy Identities of Germany and Japan: Past, Present, Future

Chair: Takashi Inoguchi (University of Tokyo)
Papers: Akio Watanabe (Aoyama Gakuin University), “Japanese and German Foreign Policies in Comperative Perspectives” and Reinhard Wolf (University of Halle), “Between Revisionism and Normalcy: Change and Continuity of Germany’s Foreign Policy Identity during the 20th Century”

Discussants: Yoichi Kibata (University of Tokyo) and Volker Rittberger (University of Tubingen)

Session 2: The Politics of Alliance

Chair: Takako Ueta (International Christian University)

Papers: Jitsuo Tsuchiyama (Aoyama Gakuin University), “Alliance in Japanese Foreign Policy: The Politics of Alliance” and Dirk Nabers (University of Trier), “Germany and NATO: The Politics of Alliance”

Discussant: Yoko Iwama (National Graduate Institute for Policy Studies) and Reinhard Wolf

Session 3: Regional Integration: Approaches, Achievements, Deficiencies

Chair: Thomas Risse (European University Institute)

Papers: Toshiro Tanaka (Keio University), “Germany and Regional Integration: Approach, Achievements and Deficiencies” and Hans Maull (University of Trier), “Japan’s Policies Towards East Asia:

Approaches, Achievements, Deficiencies”

Session 4: International Economic Order: Policies on World Trade and Finance

Chair: Volker Rittberger

Paper: Yoshiko Kojo (University of Tokyo), “Japan’s Foreign Economic Policy in Multi-layered International System”

Discussants: Takahiro Yamada (Sophia University) and Hans Maull

9月20日

Session 5: The Use of Force

Chair: Yoshinobu Yamamoto (University of Tokyo)

Papers: Akihiko Tanaka (University of Tokyo), “The Domestic Context: Japanese Politics and U. N. Peacekeeping” and Lothar Brock (J. W. Goethe University), “The German Debate on Humanitarian Intervention in the Context of the Kosovo War”

Discussants: Masayuki Tadokoro (National Defense Academy of Japan) and Dirk Nabers

Session 6: Official Development Assistance

Chair: Thomas Risse

Papers: Saori Katada (University of South California), “Japan As the No. 1 Aid Donor in the 1990s: The Factors behind Two-Track Aid Approach” and Lothar Brock, “The Development of German Development Assistance: From Economic Defense to Managing Global Change?”

Discussants: Kozo Kato (Sophia University) and Manfred Knapp (Universitat der Bundeswehr Hamburg)

Session 7: Japan and Germany in a Changing United Nations (Open to Public)

Chair: Hideo Sato (United Nations University/ University of Tsukuba)

Papers: Toshiya Hoshino (University of Osaka), “Japan, the United Nations, and the Shaping of International Order” and Manfred Knapp, “Germany’s Stance on the Issue of UN Reform in the 1990s”

Discussants: Ryo Oshiba (Hitotsubashi University) and Thomas Risse

(文責: 山田 敦)

《東京地区大学院生研究会の活動報告》

今年5月13日, 研究会活動の一環として, 英国キール大学の菅波英美教授をお招きし, 「英国学派の国際政治論再考」というテーマでの報告をお願いした。討論者

としては, 野崎孝弘会員 (早稲田大学大学院) と, 司会者を兼ねて責任者自らがを行い, その後に活発な議論を行った。出席者は, 約30名であった。

現在英国では, ヘドリー・ブルの研究などを再検討して, 英国独自の国際政治研究の伝統が見直されてきている。一方で, 英国学派に関する議論には, その系譜の「グルーピング」を明瞭にしようとする見解が存在する。菅波教授は, そのような「ins and outs」としてではなくて, 「a school of thought」として, より緩やかな学派としての「英国学派」の独自性を追求する必要を主張した。また, 英国学派がワイトとブルの理論ばかりに偏り, 元LSE教授C. マニングの「国際社会論」もまた再検討する重要性を指摘し, 英国学派の特色をより深くかつ広く見直す必要を説いた。菅波教授は, 最近の米国での国際政治理論の動向などにも触れて, 「国際政治理論とは何か?」という大きな問題についても言及された。

それに対して, 野崎会員からは, グラムシの理論が, 英国学派ではどのような位置づけにあるかを問い, さらに司会者から冷戦後に英国学派がむしろ分解の傾向にあるのではないかという疑問が投げかけられた。それに対して菅波教授は, 最近英国で英国学派が再興しつつある中での問題点や課題などにも触れて, 興味深い見解を示した。また, それ以外には, E. H. カーの位置づけや, 国際政治研究と国際法研究の総合の必要など, 多岐にわたる質疑応答がなされた。これまでの研究会では, 国際政治理論を扱った報告が希であったため, 従来とは異なる多くの問題提起がなされ, それらに対して, 英国学派の第一人者の一人である菅波教授に的確に説明頂いたことは実に有意義であった。

次回以降の研究会は, 早稲田大学大学院の野崎孝弘会員に責任者となって頂くことをお願いいたしました。これまで多くの大学院生の方々の積極的なご参加を頂き, 充実した議論と交流の場となりましたことを, 心からお礼申し上げます。今後とも大学院生どうしが率直に議論を行う機会として, 大学院生研究会を活用して下さるよう, お願い申し上げます。(東京地区大学院生研究会責任者: 細谷雄一)

《英文機関誌委員会からのお知らせ》

1. 英文雑誌は, 2001年2月に第一巻第一号が刊行されます。2000年9月末までにはそのためのほとんどの原稿が制作過程に突入します。第一巻第一号は, 著名な学者に依頼したものが少なくありません。ジョセフ・ナイ, サミュエル・ハンチントン, カレビ・ホルスティ, シャロット・クワ/ハロルド・ジェイコブソン, フリードリッヒ・カラトッチウィル, ロバート・コックスなどです。第一巻第二号は, 普通の編集手続きを経たものが主流になります。理論的なものだけでなく, 実証的な

もの、とりわけアジア太平洋地域の国際関係を分析したものが多くなります。学会員からの優れた論文も刊行されます。

2. 原稿の流れは順調です。すでに40から50の原稿がきています。原稿一本に4人のレフェリーをつけています。4人のうち1人は学会員に可能な限りしています。問題は、学会員のなかで、なしのつぶでか、非常に遅いか、多忙でレフェリーをする暇がないと断る方がかなり多いことである。すでにのべ50人位の学会員に頼んでいることになるが、レフェリーとしてのコメントを返送している人は10人弱にすぎない。したがって外国にレフェリーを出すことが大半なのだが、この方が平均してより早く、しかもより中身のあるコメントが返ってくる。学術誌のいいところは論文についてレフェリーがいろいろコメントしてくれるおかげで、より良い論文に改定され、より良い論文だけが掲載される力学を内包していることである。学会の雑誌である以上、学会員の積極的な取組みを期待しています。

編集業務は膨大な通信を扱うために、英語とコンピューターの能力のあるマンパワーが編集には必要です。学会は現在常勤の編集秘書・編集助手をかかえるだけの財政力をもちません。しかし締切は容赦なくきます。レフェリーを依頼されたら、迅速にコメントをご返送下さい。お願いします。それなくしては学会の雑誌としての内実を失います。しかも編集長の仕事だけが増えることとなります。編集とは操作的にはつねに沢山の手紙をかくことです。編集関係のEメールの本数は、一年にほぼ5千本です。発信と受信は半々です。

3. 50位の出版社に書評のために新刊書を送ってくれと要請し、20以上の出版社から本が流れ始めました。次から次に書評を頼んでいます。日本語や中国語あるいはほかのアジア言語で書かれた本を是非書評したいと思われる方は書評担当編集委員の田中明彦教授にご連絡下さい。英語で書かれた本についても同じです。書評を依頼されたら迅速にご返答下さい。お願いします。

4. 編集委員会はいろいろな機会をとらえて開催しています。大体東京です。ただ、東京にいる時にはかえって全員が集まるのが不可能です。米国政治学会(APSA)と米国国際政治学会(ISA)において朝食を兼ねた編集委員会を2000年2月と9月に開催しました。大勢の方(多くのアジアの方も)が参加し、しかもみずからの経験をもとに親切でしかも役立つ助言や考えを沢山提出してくれました。大変助かります。しかも初めての試みということで、温かい励ましを沢山戴きました。このための費用は朝食代一人1000円位です。10人から15人の会合になります。旅費は学会と関係のない費用でまかなっています。したがって海外での編集委員会は、一回一万円とか一万五千円とかの出費で、非常な便益を

得ています。

5. オックスフォード大学出版社、大同生命国際文化基金、朝日新聞社と協力して、2001年1月にこの雑誌のための会議を開催します。主題は主権、主権について哲学的、理論的、歴史的に検討することです。とりわけアジア太平洋での発現形態について検討していきます。やはりレフェリーをつけて雑誌の特集号にする予定です。

6. 学会の雑誌は学会員の参加を強化することなしに成長しないとします。学会の雑誌だからこういうこともああいうことも、すべきだという意見を多く聞きます。ごもっともなのですが、学会は編集に必要な財政力に弱く、しかも学会員のなかで編集に規則的に常時係わるだけの意欲と時間的な余裕のある方はなかなかおられないのです。論文執筆、論文評価、書評などについてはとりわけ活発に参加していただけることを信じています。すべて以下にご連絡下さい。

(又頁: 猪口 孝)

《2000年度ISA年次大会に参加して》

篠田英朗(広島大学)

国際学術交流基金の旅費補助をいただいて、3月14-18日に米国ロサンゼルスで開催されたInternational Studies Association(ISA)の2000年度年次大会に参加した。ISAの年次大会の参加はこれが三回目であり、報告は二度目だったが、いつもながらにその規模の大きさには感嘆させられた。大会はたいがい高層ビル群の一角を占める巨大ホテルの中で行われ、4日間で400ほどのパネルが毎日8:30から17:30まで続いていく。多様な国籍・学問的立場の人々が多数集まるISAの魅力は、まずはこの規模の大きさそのものであると言ってよいだろう。

最近のISAを特徴づけるのは、何といたってもコンストラクティヴィズムの強い影響だろう。一昨年に参加したときに、中堅研究者のパネリストたちがアレクサンダー・ウェントが会場に現れると色めきだち、「アレックス」に議論を挑んでいたことをよく覚えている。今年はむしろコンストラクティヴィズムへの言及は減少気味だったような印象も受けたが、それでも国際関係における理念的側面の再検討という大きな流れは基底にあったように思う。

このようなISAの年次大会に、大家の長年の研究をじっくり聞き入る雰囲気を求めるのは難しい。だがその代わりにそこでは、各人が専門を生かして時代の課題に取り組み、他の研究者や実務家と議論を交わすフォーラムとしての機能が保たれている。たとえば今年の特徴の一つは、異なったテーマの様々なパネルでNATOのコンソバ空爆問題が話し合われたことだろう。私の報告もまた、国際関係の理論を扱うパネルで、コンソバ紛争におけ

る NATO の軍事介入の正当性を理論的側面から検討していくものだった。空爆をめぐる NATO 指導者たちの発言を類型化して分析した上で、国際関係思想の伝統の文脈で解釈し直してみたのである。討論者になっていたのは、コンストラクティヴィズムの台頭で有名になったニコラス・オヌフ教授であり、国際関係理論・国際法・政治理論の分野に造詣が深い。拙著 *Re-examining Sovereignty* の出版に際しても原稿に目を通していただいたが、今回もやはり貴重なコメントをいただいた。こうした日本にはあまりいないタイプの方にコメントしていただけるのも、ISA のような学際的な海外の学会参加の魅力だと思う。

《国際学術交流—海外学会の参加して》

エルドリッチ・ロバート
(財団法人サントリー文化財団フェロー)

日本国際政治学会国際学術交流基金助成金により、私は去る 7 月 1 日から 4 日まで、米国ワシントン州シアトルで開催された International Society of Political Psychology (ISP, 政治心理学国際学会) の第 23 回研究大会に参加し、「奄美 (大島) 復帰運動: その起原、行動、意義と影響」について発表させて頂いた。

周知のように、ISPP は 1978 年に創立され、世界からの国際政治、国際関係論、政治学、心理学などの分野の専門家から構成されている。会員の名簿、または、大会参加者の名簿に一度目を通すと、学会の多国性が分かる。今回の大会に参加した学者たちは、およそ 35 カ国から来たと発表された。それぞれの専門分野、研究アプローチ、そして豊かな国際性のため、4 日間の議論は活発で、非常に面白かった。

私の発表は、東アジアの政治 (East Asian Politics) というパネルの一つであった。もう二つは、中国の外交 (国際関係論の観点) と中国のナショナリズム (国際政治の観点) についてであった。前者の発表者は、イスラエル出身の研究者で、後者のほうはマレーシアからであった。司会する予定の日本の学者が、急に帰国しなければならなかったため、私は代わりに司会を務めた。議論やコメントが活発で、刺激のあるセッションであり、時間を少し延長した。

さて、先に触れたように、私は奄美の復帰運動について発表した。海外はもちろん、日本でも奄美についてあまり知られず、研究されていない。実は、私の奄美との出会いは最近のことであった。今まで、私は日米関係と沖縄について研究しており、アメリカで近刊する予定の *The Origins of the Bilateral Okinawa Problem: Okinawa in Postwar U. S.-Japan Relations, 1945-1952* はその成果の一部であるが、その研究をしながら、戦後奄美の状況、そして奄美の返還過程史について興味を持つ

ようになった。

8 年余りの米軍占領・統治下の奄美大島が日本に返還されたのは 1953 年 12 月 25 日であった。いうまでもなく、日本政府や国民をはじめ、ことに約 22 万の島民と本土で生活していた 20 万人の奄美出身者は、奄美の返還を大歓迎した。この返還過程において、奄美の復帰運動は、欠かせない役割を果たした。とりわけ、東京にあった全国奄美連合総本部のもとにあった「奄美大島日本復帰対策委員会」及び名瀬市にあった「奄美大島日本復帰協議会」は、大きな役割をした。

当初、私は、復帰運動が米国の外交政策に影響を及ぼすものと思わなかったが、調べるうちに、復帰運動が実際に米国の対日・対沖縄政策、そして日本の対米政策にかなりの影響を与えていたことが分かるようになった。現在の市民社会や市民運動の原点の一つを理解するために、大きなヒントになるかもしれない。

追記: 昨年 7 月に、奄美大島でフィールドワークを行うに当たって、私は、神戸大学の先輩であり、鹿児島県立短期大学の先生であった境井孝行さんに変えて下さった。先日、丁度この原稿を書き終えようとしたとき、境井さんが若くしてお亡くなったという知らせを受けた。境井先輩の御逝去は、私個人、そして我々の日本国際政治学会にとって大きな損である。境井先輩のご冥福を心からお祈り申し上げます。

《国際学術交流—海外学会に参加して》

山倉明弘 (天理大学)

2000 年 8 月にワシントン DC で行われたアメリカ社会学会の第 95 回年次全国大会に、本学会の国際学術交流助成をいただいて参加しました。学会長のジョー・フェイゲン教授から、今年の大会は国際的なものにしたので日本からの参加もほしいと誘われたこともあって、かねてから情報交換をしていた米国と日本の研究者を誘って、セッションをひとつ組織しました。

幸いにも、私たちの日頃の関心事である日系人戦時強制立ち退き・抑留が、今年度の大会のテーマ *Oppression, Domination & Liberation* (抑圧と支配と解放) にぴったりでした。そこで、*Race, Law, and Civil Liberties: U.S. Government Treatment of the Japanese in the United States during World War II* (人種と法と市民的自由—第 2 次世界大戦中の米国政府の日系人対策—) というタイトルの下、次の 3 本の研究発表を行いました。1) 米国市民権放棄者の国外追放問題、2) ベル—日系人米国抑留問題、3) 米国本土とハワイでの日系人対策における本質的同質性。いずれも、これまであまり研究されてこなかったテーマです。

このうち、私自身の発表は 3 番目です。従来の日系人

戦時抑留研究では、本土と違ってハワイでは集団立ち退きはなく、したがってハワイは特別なケースであるとして、どちらかという本土抑留の研究で脚注的に扱われるのが普通でしたが、その再評価が狙いでした。「敵性」外国人の逮捕・抑留、ハワイ・本土での日系人の強制立ち退き・抑留、ハワイ・本土の日系社会対策、の3点について比較検討し、その本質は「好ましからざる」マイノリティの封じ込めであると結論を出しました。幸い、狙いはおもしろいと好意的な評価を頂きましたが、厳しく批判されるのはこれからでしょう。

セッションが終了してから、日系人抑留の研究者や関心を持っている人たちが歓談や情報交換を行いました。これがなかなか終わらず、むしろセッションそのものよりも充実していました。私が20年間尊敬しその著書も熱心に読んできたにもかかわらず、一度もお会いする機会がなかったスタンフォード・ライマン教授や「戦時民間人転住・抑留に関する委員会」の公聴会記録の編集責任者であるバーバラ・クラフト博士も見えて、楽しく歓談したのは実に幸運でした。

本学会の助成で、このような有意義な機会が可能になり、心から感謝申し上げます。

《国際学術交流基金委員会からのお知らせ》

2000年の度第3回助成申請を下記の要項で受け付けます。

【申請資格】50歳前後までの正会員（選考に際しては若手を優先し、かつ申請年度を含め継続して2年以上会費が納入されていることが必要です）。

【助成の対象となる事業】原則として申請後1年以内（2001年11月まで）に海外で実施予定の学会における研究発表を対象とします。

【申請期限および申請先】

①締め切り：2000年11月24日（金）（必着）

②申請先：日本国際政治学会一橋事務局

〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学磯野研究館内

【申請方法】

①上記事務局宛てに、郵便にて、80円切手を貼った返信用封筒を同封して申請用紙の送付を願い出てください。

②申請用紙に必用事項を記入し、さらに必要書類（プログラムや旅費の見積りなど：詳細は申請者に連絡します）を添付して期日までに上記の申請先までお送り下さい。

【決定の通知と助成金の交付】2001年2月初旬までに、採否を決定する予定です。決定次第通知しますが、助成金は発表草稿が事務局に送付された後に交付されます。

（文責：松下 洋）

《『国際政治』第128号原稿募集（再掲）》

『国際政治』128号（2001年10月発行予定）の特集論文を、次の要領で募集します。特集の題目は、「国際政治と比較政治の間」（仮題）です。国際関係と各内政の間には、どんな関係があるのでしょうか？ 国際政治と比較政治という二つの分野は、これまで接触が乏しく、内政と国際関係の相関を捉える理論も不足しています。そこで、国際政治学者、比較政治学者、あるいは地域研究者のそれぞれが、それまでの仕事から一歩先に出て、国際政治と国内政治が交錯する地点を捉えてみよう、これがこの特集の目的です。これだけでは抽象的ですから、理論サーベイと並び、三つの具体的な争点を掲げ、合計四つの柱を中心に編集を進めます。(1) 国際政治分析と比較政治理論との間にはどのような関わりがあり、あるいはあるべきだったのか、(2) 政治体制の民主化過程において、国際的要因はどのような影響を及ぼしたのか、(3) 世界市場の統合が進むと、各国の経済政策は似たものに収斂するだろうか、(4) 国際紛争が展開するうえで、当事国以外の国の世論は、どのような役割を果たすのだろうか。どれをとっても難しい問題ですが、関心をそそられた方は奮ってご応募ください。論文を応募される方は、論文の題目と趣旨を600字から800字程度にまとめ、自宅・勤務先の住所、電話番号、ファックス番号、電子メールアドレスなどを明記した上で、2000年11月1日までに編集責任者に、できれば電子メールにてご応募ください。テーマとの関係を検討した上で、執筆をお願いする方には、編集責任者からご連絡いたします。論文の最終〆切は2001年6月末、原稿の長さは註を含めて2万字（400字詰原稿用紙にして50枚）以内です。なお、最終的な掲載はご論文提出後に決定いたしますのでご了承ください。執筆要領については『国際政治』125号をご覧ください。

編集責任者：藤原 一

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学法学部研究室

電子

《『国際政治』第129号原稿募集》

『国際政治』第129号（2002年1月刊行予定）の特集論文を、次の要領で募集します。特集の題目は、「国際政治と文化研究」です。冷戦終結後の今日、グローバリゼーションが様々な局面において進展し、グローバル文化や国際社会の成立が論じられる一方で、世界の国民国家では主流国民によるナショナリズムが強化されはじめ、文化・文明の違いにこだわる動きも生じています。このことは世界各地での地域統合の動きと、それへの反発のなかにも見て取れます。その結果、国民文化の違いや文明の違いが国際関係にどのように影響を与えているのか

(与えていないのか)について、改めてじっくり考える必要ができたのではないかと思います。

しかし、国際関係研究では文化論的研究は著しく遅れています。そこで国際関係における文化論的視点を展開させたいというのが今回の特集の目的です。具体的には、(1) 国際関係における文化論的視点(文化研究的視点を含む)とはどうあるべきかなどに関する方法的・理論的考察、(2) 文化論的な視点からの国際関係に関する具体的・実証的考察、(3) グローバリゼーションのもと多文化・多民族社会化する国民国家とその国際関係の特質についての考察、(4) 国際紛争を防ぐ手立てとしての国際文化交流の役割に関する考察を中核とする論考を募集します。なお、本特集ではとくに地域を限定しませんが、近年オセアニア関連の特集がないこともあり、同地域の研究をされている方の本特集に沿った論文の投稿を期待します。

論文を応募されたい方は、論文の題目と趣旨を600字から800字程度にまとめ、自宅・勤務先の住所、電話番号、ファックス番号、電子メールアドレスを明記の上、2001年2月末日までに編集責任者にお送り下さい(早期のお申し込み歓迎)。テーマとの関連を検討した上で、執筆をお願いする方には編集責任者から後にご連絡いたします。論文の最終締め切りは2001年9月末、原稿の長さは注を含めて2万字(400字詰原稿用紙50枚)以内です。

編集責任者：関根政美

住所：〒108-8345 東京都港区三田2丁目15-45 慶應義塾大学法学部関根研究室

電話： メディア・コム研究

《事務局便り》

○木戸翁元理事長が去る6月10日に御逝去されました。慎んで御冥福をお祈りします。

○日本学術会議第18期会員に佐藤英夫理事と毛里和子理事が就任されました。

○本学会の2000-2002年期評議員、理事、監事が確定しました。去る5月20日の総会でお認めいただいたように、まずニューズレターで御報告し、来年5月予定の総会です承をいただきます。なお評議員、理事、監事の名簿は本ニューズレターで別途掲載します。選考の過程は次のとおりです。4月22日の評議員候補者選考委員会で次期評議員候補者が選出され、7月8日に次期評議員予定者が確定しました。次に規定にしたがって理事及び監事候補者の選出が行われました。まず評議員予定者による理事と監事の選挙が郵送により7月12日から8月

9日まで行われました。8月12日に選挙管理委員会を開催し、開票作業と開票結果に基づく理事及び監事候補者の選出を行いました。9月9日に次期理事及び監事が確定しました。そして、役員と評議員との兼任を次期より禁止するとの決定にしたがい、理事及び監事の予定者には次期評議員を辞退していただき、最終的に次期評議員が確定しました。

○第10回運営委員会が7月8日(土)12時30分-18時30分、はあといん乃木坂健保会館で開催されました。審議内容のうち各委員会からお知らせすべきものを除くと、主なものは次のとおりです。

1. 20件の入会申し込みを全て仮承認しました。
2. 次期評議員予定者633名が確定しました。7月12日に理事及び監事の選挙を依頼し、8月9日に締め切ること、8月12日に選挙管理委員会を開催することが決まりました。委員については、5月19日の理事会で小此木理事と北岡理事を役職委員(運営委員)の他に選出されたことを確認しました。

○選挙管理委員会が8月12日(土)10時30分-17時30分まで東京大学駒場キャンパス2号館で開催されました。厳正に開票し、その結果を踏まえて、規約にしたがって理事及び監事の候補者を選出しました。

○第11回運営委員会が9月9日(土)12時30分-16時30分、はあといん乃木坂健保会館で開催されました。審議内容のうち各委員会からお知らせすべきものを除くと、主なものは次のとおりです。

1. 6件の入会申し込みを全て仮承認しました。
2. 次期理事及び監事が確定しました。理事及び監事予定者には、評議員を辞退していただくことが確認されました。
3. 機関誌の著作権が学会に属することが明記されたことを踏まえ、学術著作権協会(旧、学協会著作権協会)と機関誌の複写権についての契約手続きに入ったことが報告されました。
4. 寄附行為の一部変更について外務省より正式に発議することの了解を得たことが報告され、次回理事会で正式の手続きに入ることが決定されました。
5. 学会としてホームページを持つ方向で検討することになりました。また、研究大会でのペーパー配付をめぐる問題も大会専用ホームページを作成することを検討する中で改善をめざすことになりました。

(東京大学事務局)

《2000~2002年期評議員、理事、監事名簿》

○評議員名簿

青木一能、赤木完爾、赤根谷達雄、赤羽恒雄、秋田茂、秋月弘子、秋吉祐子、明田ゆかり、浅香幸枝、浅川公紀、麻田貞雄、浅野亮、浅見政江、阿南東也、阿部純一、安

部文司, 天川晃, 荒井功, アレキサンダー, ロニー, 安藤次男, 安藤正士, 飯倉章, 飯野正子, 家正治, 家近亮子, 井口治夫, 池田明史, 池田十吾, 池本修一, 石井明, 石井貫太郎, 石井摩耶子, 石川一雄, 石川孝樹, 石川捷治, 石川照子, 石黒馨, 石田淳, 石田信一, 石田正治, 石田勇治, 石原司, 并尻秀憲, 伊豆見元, 伊豆山真理, 磯村早苗, 板垣雄三, 板谷大世, 市川ひろみ, 市川正明, 伊藤勝美, 伊藤憲一, 伊藤剛, 伊藤皓文, 伊藤信之, 稲田十一, 稲葉千晴, 伊能武次, 井上一明, 井上寿一, 井上勇一, 今泉裕美子, 今川瑛一, 今城義隆, 岩崎正洋, 岩崎美紀子, 岩下明裕, 岩田賢司, 岩田修一郎, 岩間陽子, 岩本祐二郎, 犬童一男, ウェストン, ステファニー, 植田隆子, ウェッセルズ, デヴィッド, 上野俊彦, 上原良子, 上村英明, 植村秀樹, 宇佐美滋, 臼井久和, 臼井実穂子, 臼杵陽, 臼杵英一, 宇多文雄, 内田孟男, 梅津実, 梅村光弘, 梅本哲也, 浦野起央, 浦部浩之, 江戸淳子, エドストローム, バート, 江原裕美, 袁克勤, 遠藤誠治, 遠藤貢, 王子天徳, 大井孝, 大泉敬子, 大内穂, 大木毅, 大串和雄, 大熊忠之, 大崎雄二, 大沢博明, 大島美穂, 太田昭子, 太田一男, 太田勝洪, 太田宏, 太田正登, 大津留智恵子, 大沼保昭, 大庭千恵子, 大橋英夫, 大林洋五, 大矢吉之, 大矢根聡, 岡俊孝, 岡倉徹志, 小笠原高雪, 小柏葉子, 岡部達味, 岡本幸治, 岡本三夫, 小川和久, 小川敏子, 奥田和彦, 小倉充夫, 小澤治子, 落合浩太郎, 落合雄彦, 小野直樹, 賀川真理, 笠原十九司, 梶浦篤, 梶田孝道, 鹿島正裕, 粕谷進, 片桐庸夫, 片原栄一, 片山裕, 加藤朗, 加藤秀治郎, 加藤普章, 加藤正男, 加藤洋子, 加藤陽子, 金丸輝男, 金子讓, 金子芳樹, 我部政男, 鎌田真弓, 上村直樹, 神谷万丈, 神山晃令, 亀井紘, 加茂雄三, 川上高司, 川崎剛, 川端正久, 川原彰, 川本謙一, 河原地英武, 河原匡見, 菊井禮次, 菊池努, 木坂順一郎, 貴志俊彦, 岸川毅, 喜志麻孝子, 吉川元, 木戸衛一, 木宮正史, 金成浩, 金鳳珍, 木村朗, 木村修三, 木村汎, 木村宏恒, 木村昌人, キャンベル, ジョエル, 清野健, 草野厚, 草間秀三郎, 功刀達朗, 久保文明, 蔵重毅, 倉田秀也, 黒川修司, 黒沢文貴, 黒沢満, 黒田俊郎, 黒田美代子, 黒野耐, 黒柳米司, 吳忠根, 小池聖一, 小池康弘, 小泉康一, 小泉直美, 黄昭堂, 許世楷, 上坂昇, 高坂誠, 甲山員司, 河野勝, 河野康子, 高山英男, ゴウリーギン, エヴゲーニィ, 小久保康之, 小島朋之, 古城佳子, 小杉泰, 小竹一彰, 児玉克哉, 児玉昌己, 後藤一美, 後藤乾一, 後藤春美, 五島文雄, 小沼新, 小林誠, 駒村哲, 五味俊樹, 小山三郎, 近藤重克, 近藤三千男, 斎藤修, 斎藤聖二, 斎藤治子, 斎藤正寿, 斎藤元秀, 斎藤祐介, 佐伯康子, 嵯峨隆, 酒井啓子, 境井孝行, 酒井哲哉, 酒井由美子, 坂本清, 坂本正弘, 桜川明巧, 櫻田大造, 佐々木卓也, 佐々木りつ子, 佐瀬昌盛, 定形衛, 佐藤栄一, 佐藤恭三, 佐藤考一, 佐藤信一,

佐藤元英, 佐藤幸男, 佐藤雪野, 佐渡友哲, 澤田眞治, 塩崎弘明, 塩出浩和, 志柿光浩, 下羽友衛, 志鳥学修, 信田智人, 篠永宣孝, 篠原初枝, 信夫隆司, 柴宜弘, 柴田純志, 志摩園子, 島岡宏, 島袋純, 清水さゆり, 首藤もと子, 庄司克宏, 庄司潤一郎, 庄司真理子, 白石仁章, 白鳥令, 城山英明, 新川健三郎, 進藤栄一, 末内啓子, 末沢恵美, 菅原淳子, 杉田米行, 鈴木董, 鈴木規夫, 鈴木基史, 須藤修, 須藤真志, 須藤季夫, 首藤信彦, 砂田一郎, 住吉良人, 巢山靖司, 関静雄, 関根政美, 関場誓子, 瀬島誠, 仙石学, 曾根泰教, 多賀秀敏, 高木誠一郎, 高杉忠明, 高瀬幹雄, 高塚年明, 高橋和, 高橋和夫, 高橋進 (龍谷大学), 高橋伸夫, 高橋久志, 高橋均, 高橋基樹, 高原明生, 高原孝生, 高松基之, 高安健一, 高柳彰夫, 滝口太郎, 滝口剛, 滝田賢治, 田北亮介, 田久保忠衛, 竹内俊隆, 武貞秀士, 竹田いさみ, 武田康裕, 竹中千春, 竹中佳彦, 武見敬三, 多胡圭一, 田嶋信雄, 立山良司, 辰巳浅嗣, 田所昌幸, 田中恭子, 田中高, 田中靖政, 田中義皓, 谷垣真理子, 谷口弘行, 玉木一徳, 玉田芳史, 玉本偉, 田村慶子, 唐亮, 千葉浩美, 趙宏偉, 塚本元, 月村太郎, 辻塚也, 土山實男, 筒井洋一, 恒川恵市, 坪郷實, 貫芳裕, 都留康子, 寺地功次, 涂原彦, 卓南生, 東郷育子, 遠矢浩規, 徳田教之, 土倉莞爾, 土佐弘之, 戸田真紀子, 戸田三三冬, 戸部良一, 都丸潤子, 富田健次, 富田広士, 友田錫, 豊下楯彦, ドリフテ, ラインハルト, トローラー, ゲイリーグレン, 内藤酬, 中井和夫, 長尾悟, 長尾雄一郎, 中川原徳仁, 中澤孝之, 中嶋嶺雄, 中園和仁, 長田彰文, 中邊啓示, 永網憲悟, 中西治, 中西輝政, 中西久枝, 中西寛, 中野聡, 中野潤三, 永野慎一郎, 中野博文, 中原喜一郎, 中見立夫, 中見真理, 中村平治, 中村楼蘭, 永山博之, 納家政嗣, 奈良本英佑, 西川敏之, 西崎文子, 西原正, 西村成雄, 西村文夫, 西村めぐみ, 二宮三郎, 二宮正人, 野田宣雄, 野林健, 則武輝幸, 袴田茂樹, 蓮見博昭, 秦郁彦, 畑恵子, 波多野勝, バックレイ, ロジャー, 服部一成, 花井等, 馬場明, 濱口學, 浜口裕子, 濱下武志, 林晃史, 林忠行, 林義勝, 原貴美恵, 原彬久, 原口邦紘, 播里枝, 判沢純太, 樋口美智子, 日暮吉延, 菱田雅晴, 肥田進, 等雄一郎, 日比野正明, 檜山幸夫, 平岩俊司, 広井大三, 広瀬晴子, 広瀬崇子, 広瀬佳一, 深谷満雄, 福島安紀子, 福嶋輝彦, 福嶋正徳, 福田耕治, 福永文夫, 藤田宏郎, 藤本一美, 藤本博, 藤原修, 二村久則, フック, グレン, フライ, ヘンリー, 古田元夫, 別枝行夫, 星野昭吉, 星野英一, 星野俊也, 細谷正宏, 堀江浩一郎, 堀本武攻, 馬曉華, 前田康博, 増島健, 増田英, 増田弘, 益田実, 増田祐司, 松井弘明, 松浦正孝, 松尾雅嗣, 松岡完, 松川克彦, 松隈潤, 松重充浩, 松下列, 松下洋, 松下マルタエレナ, 松田武, 松田康博, 松本繁一, 松本八重子, 真鍋俊二, 間宮茂樹, 丸山泉, 丸山直起, 三浦徹明, 三

浦信行, 御巫由美子, 三上貴教, 三上昭美, 御厨貴, 水口修成, 水野均, 三谷太一郎, ミッドフォード, ポール, 三橋利光, 水戸孝道, 皆川修吾, 南義清, 宮川佳三, 三宅正樹, 宮坂直史, 宮崎孝, 宮崎英隆, 宮里政玄, 宮治一雄, 宮田律, 宮本武夫, 宮本光雄, 宮脇昇, ムアング, ゴードン・サイラス, 六鹿茂夫, 村井友秀, 村上公敏, 村上信一郎, 村上勇介, 村嶋英治, 村田晃嗣, 村山高康, 村山裕三, 室山義正, 毛利勝彦, モジュタバ, サドリア, 望月克哉, 望月敏弘, 森善宣, 森井裕一, 森川純, 森田英之, 森本敏, 森山優, 森山茂徳, 森山昌俊, 森山幹郎, 薬師寺泰蔵, 安江則子, 安田淳, 安野正明, 矢田部順二, 藪野祐三, 山内昌之, 山影進, 山口圭介, 山口定, 山倉明弘, 山田敦, 山田敬信, 山田高敬, 山田辰雄, 山田満, 山田康博, 山内敏秀, 山内康英, 山本武彦, 山本信人, 山本靖幸, 山脇啓造, 湯浅成大, 横田洋三, 横手慎二, 横山三四郎, 横山宏章, 吉居(竹内)史子, 吉川宏, 吉川洋子, 吉崎知典, 吉田修, 吉武信彦, 吉村道男, 乗浩子, 容應英, ラドケ, クルト W., ラメッシュ, タクール, 李廷江, 力久昌幸, 劉傑, 林哲, ロックハイマー, ロイ, 若月章, 若林広, 若林正文, 鷺江義勝, 渡辺茂己, 渡辺正志, 渡辺啓貴, 渡邊頼純, 綿貫讓治, ワリーズ, ガース, (以上)

○理事名簿

天児慧, 五百旗頭真, 五十嵐武士, 石井修, 伊東孝之, 猪口邦子, 猪口孝, 入江昭, 大芝亮, 小此木政夫, 我部政明, 菅英輝, 北岡伸一, 木畑洋一, 国分良成, 佐々木雄太, 佐藤英夫, 下斗米伸夫, 鈴木佑司, 添谷芳秀, 高橋進(東京大学), 田中明彦, 田中孝彦, 田中俊郎, 波多野澄雄, 初瀬龍平, 羽場久泥子, 平野健一郎, 藤原帰一, 毛里和子, 百瀬宏, 山本吉宣, 油井大三郎, 李鐘元, 渡辺昭夫, (以上)

○監事名簿

池井優, 大島英樹, 小田英郎, (以上)

《事務局よりメール・アドレス通知のお願い》

ニューズレター前号でもお知らせしたように, 会員のメール・アドレスを登録することになり, 皆さんから会員である旨を明記した短いメールをいただいてアドレス帳を整備しつつあります。まだの方は, なるべく早く, ta.jp宛, 御一報ください。10月からは, 新体制に移行しますが, 改めて新しい宛先を御案内するまで, このアドレスへメールをお願いします。なお当面の間, このアドレス帳は事務局と各委員会で利用する範囲にとどめ, 会員全体あるいは外部に対して公表したり, 問い合わせに対して教えたりすることはありません。よろしく御協力ください。

2001年度研究大会の予定

日時: 2001年5月18日(金)~20日(日)

場所: かずさアカデミアパーク(千葉県木更津市)

《東京大学事務局からのお礼》

山本吉宣理事長の下で事務局を2年間務めて参りました。不慣れでいろいろな失敗をし, 会員を始め各方面に御迷惑をかけたおしでしたが, 皆様の御協力でなんとか仕事納めの日が近付いて参りました。ニューズレターの紙面をお借りして, 会員各位に厚く御礼申し上げます。

《編集後記》

元理事長の木戸翁会員がお亡くなりになった。副理事長の時に事務局を担当させていただいたので, 身近に接する機会が多々ありました。ロマンスグレーの長身で, いつもこちらを心配してくださる優しい先生でした。おいしいお酒をお供したことも忘れられません。合掌。

木村汎会員の巻頭言は, 個別地域の研究と一般理論化という, 重い課題をいただきました。自分が関心をもっているEUを中心としたヨーロッパ統合研究の分野もまたしかりです。

なお, 本号をもってニューズレター委員会のメンバーも交代します。ご寄稿いただきました数多くの会員の皆さまに厚く御礼申し上げます。学会の執行部からのお知らせの類が多く, なかなか双方向のコミュニケーションの場とならなかったことが反省点です。

編集に際してご助力いただきました副主任の酒井哲哉会員(東京大学), 会計を担当してくれた浅見政江会員(秀明大学), Emailでの編集を可能にし時間短縮に貢献してくれた細谷雄一会員(慶應義塾大学大学院, 現北海道大学)に深く感謝します。

新ニューズレター委員会にも変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。(主任: 田中 俊郎)

「日本国際政治学会ニューズレター No. 91」

(2000年10月15日発行)

発行人 山本 吉宣

編集人 田中 俊郎

〒108-8345 港区三田 2-15-45

慶應義塾大学法学部・田中俊郎研究室

TEL.

印刷所 (株)理想社

TEL. 03-3260-6177